

地名「津軽」についてーその地域と語源ー

弘前大学非常勤講師 福 士 壽 一

青森県の西部、秀峰岩木山を眺めることができる岩木川流域の地域は、故来「津軽」と言われてきた。その厳しい風土のなかで人々は、津軽民謡・津軽三味線・津軽颯・津軽塗・津軽ねぶたなど、骨太で、味が濃く、力強い、独特の文化を育んできた。その母なる大地の地名「津軽」はどこから来たのであろうか…。その地名「津軽」についての由来や語源を、それに関連する地名も考察し、探ってみることにした。

津軽＝ツガルという語が具体的にみえるのは、斉明天皇元年（655）に難波宮で「^{きかう えみし}柵養の蝦夷9人、津刈蝦夷6人に冠各二階を授く」（日本書紀）とあるのが最初である。このあと同4年（658）4月の条に「阿倍引田臣比羅夫が180艘の船を率いて^{あき}鰺田（秋田）・^{むしろ}淳代（能代）の蝦夷を伐ち、^{こおりのみやつこ}淳代・津軽の郡領を定め、有間濱で渡嶋蝦夷らを聚めて大饗をしている」記事がある。また、翌5年の条に「180艘を率いた比羅夫が、飽田・淳代・津軽・^{いぶらぎ}膽振鉏の蝦夷とその虜を集めて、饗たまひ祿賜ふ」とあり「後方羊蹄を以て、政所とすべし」という記事があり、さらに翌6年にも「比羅夫が200艘で^{みしはせ}肅慎を討った」という記事がでている。「日本書紀」の斉明紀には、^{こしのくにのかみ}越国守比羅夫が3か年にわたって、政治の外で国の後方にある津軽地方に遠征していることが書かれている。また、斉明5年（659）の記事には、遣唐使が^{みちのく}道奥の蝦夷男女二人を唐の皇帝に紹介したことが記され、その注に引用されている「伊吉連博徳書」にその問答を記録しているが、「蝦夷は国の東北におり、五穀がなく肉を食べて生活しており、屋舎はなく深山の木の下に住んでいる」ことになっている。そして「蝦夷は三種類あり、いちばん遠いのを都加留蝦夷といい、つぎが^{あら}鹿蝦夷、いちばん近いのを^{こき}熟蝦夷と呼ぶ」と書いている。このように「日本書紀」に書かれている、津刈・津軽・都加留は、現在の津軽につながるものと考えられる。なお、平安末期から江戸初期にかけて使われた「行基図」には津軽大里と書かれている。

この「日本書紀」の斉明紀の記事について、早くは新井白石が「蝦夷志」の序で「鰺田は飽田・秋田、柵養は城養、津刈は津軽・都加留、後方羊蹄は之利邊之今南之利邊之」と解釈し、渡嶋・淳代・膽振鉏は解釈を加えずに書いている。また、有間の濱についても触れていない。明治にはいつて「新撰陸奥国誌」では、「ツガルとは津借の意味であり（むかし蝦夷が松前島から渡ってきてこの国の津を借りて住んだ）、この地は日本の尽頭にあたるから、西の對馬に対して東方蕃国の津所とし、都加留の意味をあらためて津加留のそれとしたのである、津刈・津軽の津は正字で刈・軽は仮字であり、日東流（東日流）とあるのは誤用か、とする）という表現は意味にもとづいて書いたもので、日東は日本、流は^{あらぶくさいえん}荒服最遠の処の意味である。津軽をあるいは津加呂とも訓んだらしく、「清輔朝臣集」の歌などにそれがみえる。なお、都加留はツカルと清音で読むべきで、濁音の場合は都我留となるのである」、などと述べている。これに対して吉田東伍博士は、白石説以下の先行

諸説を疑わしいものとし、「ツカルは夷（アイヌ）語か、今の夷語トカリは海豹なり」とされている。

松田弘洲氏は「津軽地名の語源」のなかで、つがるについて、日本書紀に書いてある記事を解釈し、「都加留蝦夷・鹿蝦夷・熟蝦夷のツガルは自称でなく、時の政府がつけた名であるとし、三種あるのは時の政府への従順度をあらわした言葉である。ツガルも地名でなく、政府側から見た何かの称であり、形容であったということになって来る。ここでもまた、アイヌ語地名説が登場するとし、①「日本の・すぐ手前の・郷」か。②「舟・つくる場所」か。③「アザラシの・多くいるところ」か。④「アザラシ・岩」か。⑤さて、ツガルを連るをすれば“つらねつける”の意。あるいは、番る、となれば“雌雄がつるむ”の意。日本書紀の文意から考えると、アラでもニギでもない、ツガルは、連る・番る、という形容のようである。本州の先端か、渡島へ連る処となる。ここで“土着の人々”とは誰か問題となるが、筆者は、現アイヌ人の祖が、それだとは考えていない。」と書いている。（なお、筆者は、ここでアイヌ語地名説を述べているが、奥羽北部から北海道にかけてのアイヌ語地名については再検討を要すると書いている）。福田吉次郎・地名から文化を考える会編著の「アイヌ語で解く地名と文化事典」は、北海道の地名を参考に青森県の地名をアイヌ語で解釈しているが、「ツカリ＝の手前・の此方、尻旁＝シズカリ＝山の走り根・の手前の意味、北海道の長万部に酷似した地形であって静狩の文字をあてる」の文意で、ツカリについては書いているが、ツガル＝津軽については書いていない。鳴海助一先生の「津軽のことば」を調べてみると、つがるシュ（津軽衆）については書いているが、津軽の語源については書いていない。小笠原功氏は「津軽弁の世界」のなかで、『語源は「都加留」という和語から追求するべきであり、都（tsu）は「京都」の京と同じで、支配する天皇の住む「宮処」であり、「かる」は動詞の「か（離）る」で遠くなる、離れるという意味の語である。したがって「つ・かる」というのは、国の統率から、時間的、空間的にも心理的にも遠く離れたところ、即ち「化外の地」ということである。』と述べている。鏡味完二・鏡味明克著の「地名語源・角川小辞典」では、「ツガル、アイヌ後でツカリ（そのすぐ手前）の意か。またはチプ カル ウシ（舟を作った所）。ツカル ウシ（海豹の多くいる所）かもしれない。」という金田一京助の説をとっている。楠原佑介・溝手理太郎編「地名用語辞典」（東京堂出版）は、「つがる（津軽・津刈）①ツガ・カルの約で崖の発達した所、②動詞ツカル（漬）と関係し水につかる所、③ツキル（尽）の意で北の果ての所、④津軽藩の屋敷のあった所か」、と書いている。また、北海道に類例がないため、「アイヌ語とにわかに言いがたい」とも書いている。

比羅夫一行が出発したと思われる越国には、図1のように、当時、淳足柵（新潟市沼垂付近に647年）・磐舟柵（新潟県村上市岩船付近648年）が設けられ、出羽または北方の蝦夷を征討する基地としたようである。ここを出発し、比羅夫の水軍は、齧田・淳代・津軽に北上してきたと推定される。これらの地名はどのように付けられたのであろうか。淳足は、ぬ（沼・淳・野）はヌ（沼）で湿地・沼地で、たり（足・垂・谷）はタル（垂）の連用形で低い所と考えられる。淳足は新潟砂丘の内側（東側）の鳥屋潟の近くの沼垂付近に位置していたと考えられ、信濃川の河口・阿賀野川の

河口近くに位置している。磐舟は、いわ（岩・磐・石）で、イハ（岩）のつく地名はイソ（磯）と同じく、崖・斜面・堤防・岸・岩礁などで、小石まじりの地の意味もあり、三面川河口南側の新潟砂丘北部の岩船の地に位置していたと考えられる。

罫田は、アキ（秋・罫・鉤・安芸）は古語ではアギと発音された気配が強く、アゲ（上）に通じ、上がった土地、高所と考えられる。古代の秋田城は、現在の秋田城趾（現在の秋田城址は久保田城と言われ、むしろ旭川の窪地に望む台地にある）でなく、秋田と土崎の間の高清水台地（約63.5m）に733年に設けられた場所にあり、雄物川の河口近くに位置している。（最初は柵であったがこの時代には城（じょう）になっている）。なお、古語では上顎のことをアギというが、津軽弁でも、アギタ・アゲタといって残っている。淳代は、ヌ（沼・淳・野）は前述のように湿地・沼地でありシロ（白・城・代・銀）はシロ（白い色・城郭・銀細工）なども考えられるが、シル（汁・液）の変化で、水気の多い様子やぬかる状態で、たとえ

ば苗代とか、山上の湿地の田代などと同じで、やはり湿地を示す語と考えられる。淳代は現在の秋田県能代市にあったと考えられ、米代川河口近くに位置していたと考えられる。以上のようにこれらの地名の語源は自然的特徴に由来すると考えてもよいと思われる。

さて、最後に津軽についてであるが、自然的特徴の語源の1つは、ツガル（連・鎖・撃・綴）で、つらなる・つらなりつづく・くさりなどの意味である。もう1つは、ツカル（漬）で、水の中にひたる・水の中から首を出しているように少しだけ水から出るである。比羅夫の一行が船で北上してきたとき、岩崎・深浦・鯉ヶ沢の白神山地の山々や裾地、または屏風山砂丘などの山々をみて、津軽とつけたものか、または岩木川河口の十三湖（潟）の所や、上流の岩木川流域が水に漬かっている所に津軽につけたものか、2通り考えられる。

そこで、全国で津軽または津刈という地名はどういう自然的特徴をもっているか、または、歴史的由来をもっているか調べてみることにした。1つは、アボック社の国立科学博物館植物研究部・金井弘夫編の「日本地名索引上下」である。地形図の5万分の1に出ている地名を全部掲載しているものである。つがるいわずめ（津軽飯詰）駅など駅名を除くと、つかりがわ（津刈川＝碇ヶ

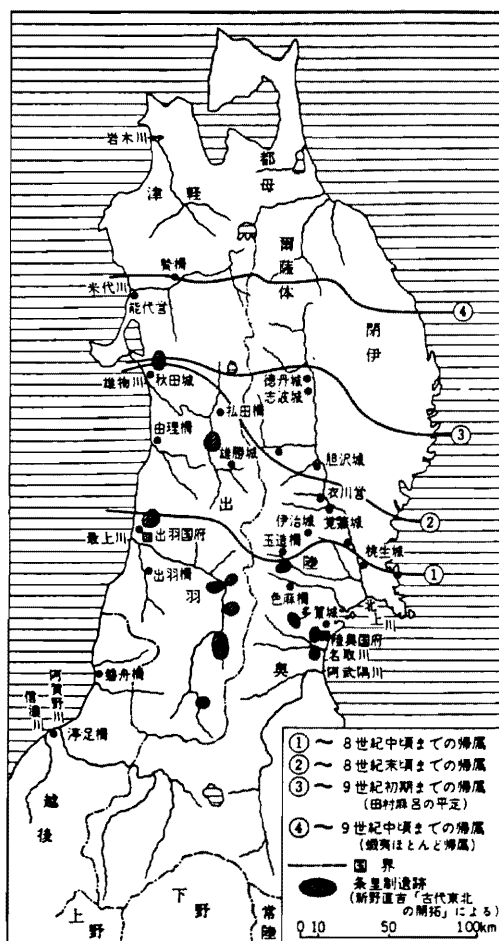


図1 東北地方開拓の進展

関）・つがるいし（津軽石＝岩手県宮古）・津軽海峡・つがるさわ（津軽沢＝鰺ヶ沢）・つがるしま（津軽島＝広島県福山）・つがるまち（津軽町＝北海道礼文南部）がでている。なお、2万5千分の1の「深浦」図幅には、つがるたいら（津軽平）が出ている。

もう1つは、「角川日本地名大辞典 別巻Ⅱ 日本地名総覧」である。前書と重複しない所をあげると、つがるぐん（津軽郡＝北海道）・つがるじま（津軽島＝宮城県女川町）・つがるちょう（津軽町＝京都市）・つがるどおり（津軽通＝札幌市）・つがるまちむら（津軽町村＝岩手県都南村）・つがるかいどう（津軽街道＝岩手県）などがでている。また、かつて津軽の地名がついていたものが、変えられたものとして、青森市の鶴ヶ坂（かつては津軽坂）・弘前市の津賀野（かつては津合流野・津軽野）がある。岩手県の津軽石川は分かっていたが、津軽の地名が広島県にもあり、しかも、津軽島が2つもあるのには、正直いってびっくりした。

そこで、最初は地形に関するものから調べることにした。福山図幅の津軽島であるが、瀬戸内海国立公園の鞆の浦の所にあった。図2のように、玉津島の南にあり、高さ16.2m、巾が約62m、長さが約150mぐらいの島で、海に漬かるような島だと分かった。「福山の文化財」に書いてある内容は「名勝 鞆公園 沼隈半島の南東 鞆から阿伏兎岬に至る断層崖東側には、仙酔島をはじめ・つつじ島・皇后島・玉津島・津軽島など大小の島々が散在している。この地は、瀬戸内海の中でもとりわけ美しく、江戸時代、鞆に寄宿した朝鮮通信使・邦彦をして“日東第一形勝”と賞賛させている。」とあり景勝の地にある小さな島である。

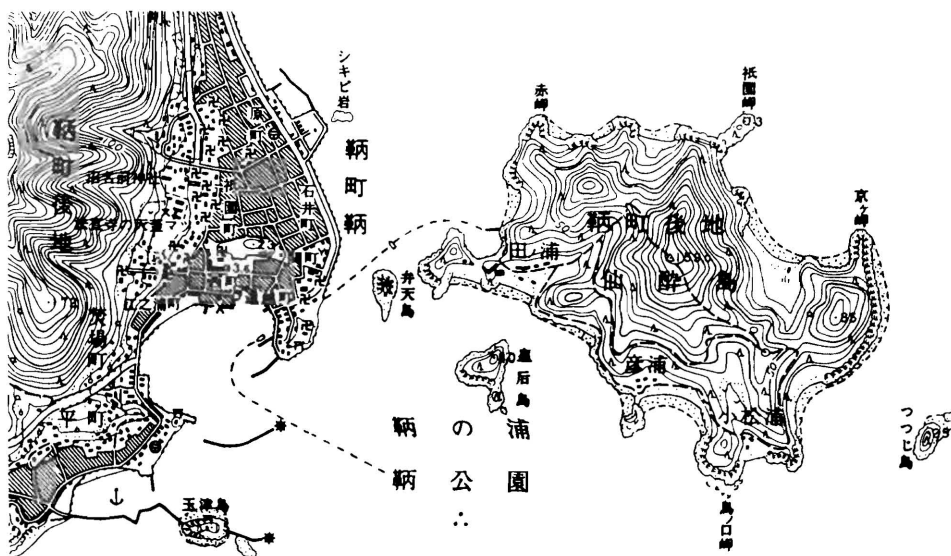


図2 (2万5千分の1)

次に女川町の津軽島についてであるが、「角川地名大辞典 宮城県」には津軽島、牡鹿郡女川町にある島名。万石浦^{きたあんじゅう}の北安住の前面に浮かぶ無人島。津軽神社がまつられている。「安永風土記」に、「その社地は南北二間半、東西二間、地主は浦宿浜屋敷六兵衛、祭日は7月11日、モチの太木がある。」とある。図3のように南三陸金華山国定公園の1部牡鹿半島のつけねの方石浦の中に小さな津軽島があった。津軽島の東岸には万石浦ホテルがあるが、そこにホテルが建てられているのは、津軽島とその背景の牡鹿半島の眺望がよいからと思われる。高さが22.5 m、巾が約95m、長さが約120mの島であることが分かった。この島も、海から頭を少し出している様な島、つまり海

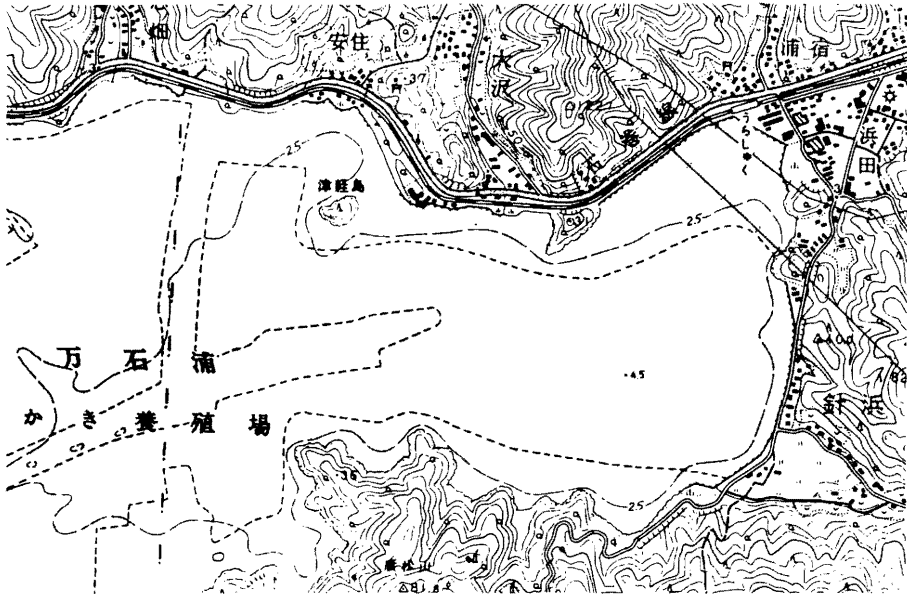


図3 (2万5千分の1)

につかるような島だと分かった。なお、津軽神社はいまは廃社だそうである。福山市の津軽島も、女川の津軽島も、陸からそう離れていない島であるが、小さくあまり高くない無人島なので、景色は好いようであるが、地元の人々にもあまり知られていない、ひっそりとした島のような島。

青森県内の津刈川(碓ヶ関)、津軽沢(鰻ヶ沢)、岩手県の津軽石川(宮古市)についてみると、津刈川は図4のように、十和田湖西の御判如森^{ごはんじょうもり}の南西麓から発し、碓ヶ関の久吉で平川に合流する川である。柴森や空岱山の山麓の細長い谷間を流れる川である。途中に久吉温泉、久吉ダムがあり、合流点近くに津刈温泉がある。津刈の地名は全国でここだけである。津軽沢は、図5のように鰻ヶ沢の八景森西麓に発し館前町で合流する小さな谷地である。川まででない沢という名がついている。この沢は春先まで雪や氷に漬かってしまっているという。深浦町長慶平の津軽平は、津軽平沢にのぞむ200m台の高原状の平地であるが、戦後、長慶平開拓の一部として外地から引揚げてきた人達が入植した所であるが、当初の12戸から7戸に減ったそうである。現在は畑作とナメコ栽培、和牛で暮らしている。入植した時はすでに名前がついていたそうである。図6の津軽石川は、比較的青森県の人々にも知られている。晩秋から初冬にかけて、さけが遡上してくることが、テレビな

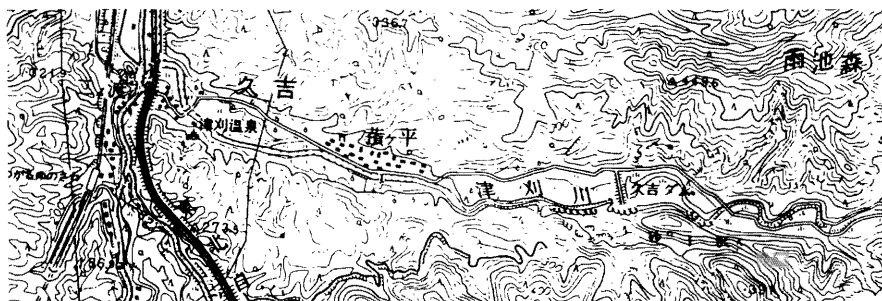


図4 (5万分の1)

どで報道されるからである。津軽石川は、豊間根川に続き、細長い谷地を北流する川である。集落の津軽石は右岸の自然堤防上に位置し、石はイソ（磯）の転で、崩崖・堤防・岸・岩礁のいずれかと考えられ、堤防にあたると考えられる。なお、イソといえば海岸に多い地名であるが、栃木県の黒磯とか、小字であるが、木造町大字永田字磯野とか、柏村大字上古川字磯野とか内陸にもある。上古川の磯野は岩木川左岸の自然堤防上にあり、津軽石と同じような地形に位置している。ここまでは、津軽についての自然地形の地名である。



図5 (5万分の1)

次に北海道滝川図幅の津軽沢であるが、現在の5万分の1の地形図でも「角川日本地名大辞典 北海道上・下」でも滝川のところで調べても分らなかった。その後の電話などの調査で、大正5年発行の地形図にのって、幌加尾白利加川の盤ノ沢の下流にあることが分かった。盤ノ沢は新十津川町の地域なので、「角川日本地名大辞典 北海道上・下」で新十津川町のところを調べたが津軽沢についての記述はなかったが、松浦武四郎（北方探検家、幕末に蝦夷地の山川地理を調査した。また、明治2年開拓判官に任ぜられ、北海道名や後志・石狩・渡島・胆振・日高・十勝・釧路・根室・天塩・北見などの国郡名の選定にあたった。北海道は、古代七道の東山道からの続きとして、後志・渡島・胆振・日高は日本書紀にちなんで命名されたものである。）が幕末に調べた「丁巳日記」の尾白利加川下流沿いのアイヌ語地名としてホンシュシュシ・ノツハヤマナイ・ホロカヲシラルカが書いてあったが、ツガルという地名は書かれていない。津軽沢について聞いてみたいと新十津川町教育委員会に問い合わせたら、

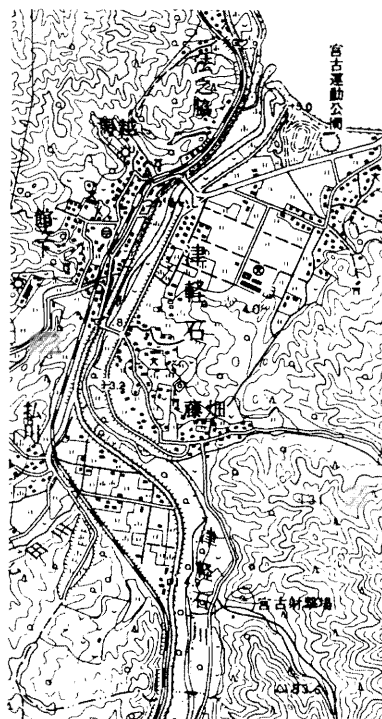


図6 (5万分の1)

「戦前に津軽から移住してきた人達が入植し、田んぼや畑を作っていたが、昭和炭坑が開かれたとき移っていった。昭和20年のときはもう住んでいない。」とのことなので、津軽沢は自然地名ではなく、人文地名であることが分かった。図7は、もう、まぼろしになっている津軽沢の地名の貴重な記録である。

以上のことでお分かりのように、北海道では、本来、ツガルという地名はなかったし、アイヌ語ではないようである。

次に津軽町・津軽通などの人文地名についてである。北海道札

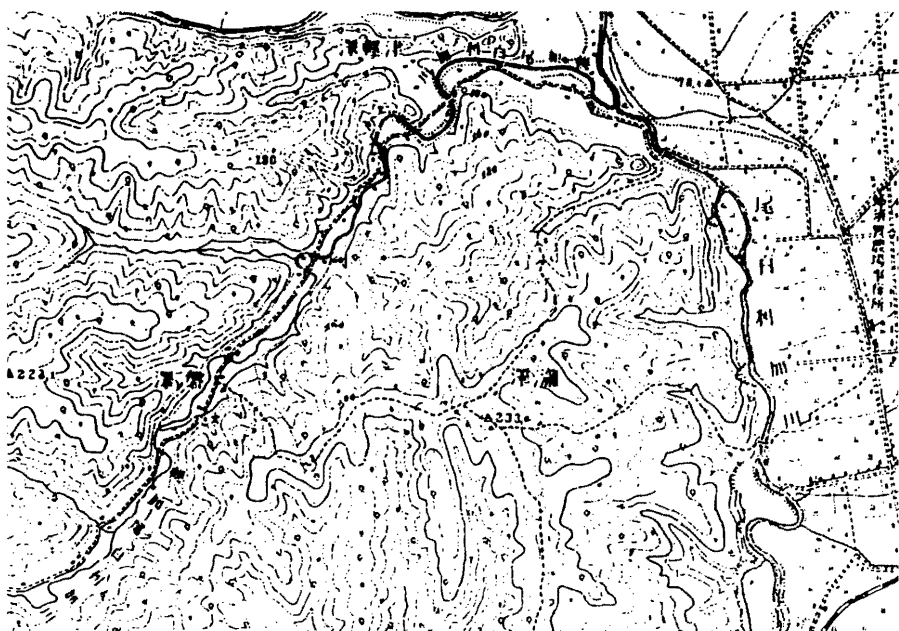


図7 (5万分の1)

文町の津軽町は「角川日本地名大辞典 北海道下」には、「初期の鯨漁業による当町の開拓は青森県人に負うところが多く柳谷家はその中心的存在であった。柳谷宗家（三厩村字鉄）である柳谷万之助が利尻島をへて^{ヒヤッパン}尽忍に渡ったのが弘化3年（1846）であるといわれている（札文町史）。その後、元治元年（1865）、柳谷兼松、明治4年柳谷文蔵・同初太郎が香深・^{カフク}尽忍・^{モトオ}元地などにそれぞれ漁場を開いた。柳谷家以外にも青森県人の移住があり、ヘウケトンナイには津軽地方の移住者による集落ができたことから、津軽町と称された。」とある。次に、津軽郡・津軽通についてであるが、「角川日本地名大辞典 北海道上」には「津軽郡、明治2～14年の郡名。明治2年国郡制設定により渡島国の一郡として成立。郡名は津軽から来た人達のいる所の意。北は原口村から南は炭焼沢村（現在白神村）までで、同14年松前郡となる」とあるが、現在の松前町の範囲である。「津軽通明治2～14年の札幌市街地の通名。創成川の西側、後志通（現大通）に平行して東西に貫通し、北は桧山通、南は福島通。津軽通の南側の直交する虻田通と交差する2町4方^{イサキの}が薄野である。同14年南4条と改称」とある。現在歓楽街として有名な薄野地区の最初の名前が津軽通であったのである。次に京都にある津軽町であるが、「角川日本地名大辞典 京都府上」に「津軽町、江戸期～現在の町名。釜座通御池下ルの縦町。“はじめ高松神社の横に位置するため横明神町と称した”（府地誌）。寛永以後、陸奥津軽藩邸がおかれたため、寛永14年洛中絵図に津軽町、寛永18年以前木版図平安城町並図に“つがる^{トウ}殿丁”、寛文12年洛中洛外大図に“津軽町”とみえる、以後変化なく、宝暦町鑑

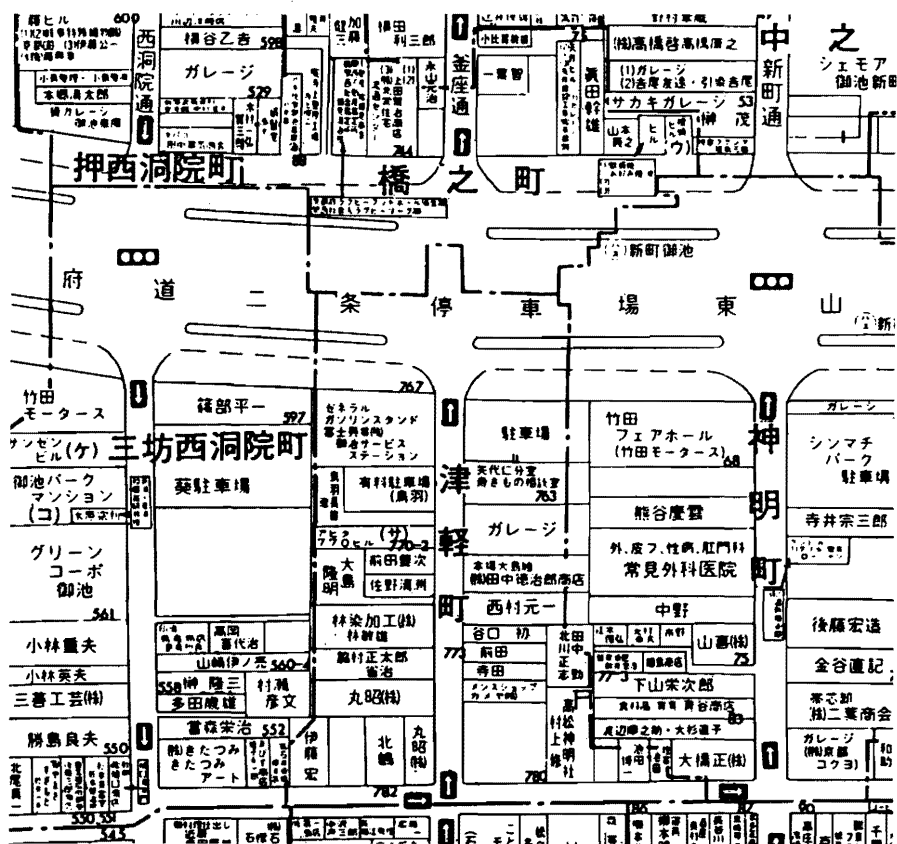


図8 京都の津軽町

には“津軽町、此町西側に津軽の御やしきあり”とある。“津軽藩邸は宝永・天明の火災に罹り、維新前廃された。”(坊日誌)、明治22年南明神町の一部を編入し、昭和4年中京区津軽町となり現在に至る。」とある。津軽町は御池通の南で、西が堀川通・東が烏丸通にはさまれた二条城東南の京都の中心部に位置しているが、エリアマップ京都区分地図(昭文社)の都市地図をみても、釜座通御池下ルは出ているが津軽町は出ていないので、ほとんどの人に知られていない(図8)。

次に岩手県の津軽町村であるが、「角川日本地名大辞典 岩手県」に、「津志田村、古くは津軽町村と二ヶ村であったが、のち津軽町村を併合して津志田一村になったという。『増補行程記』には、寛文5年(1665)11月之頃津軽町を津志田町と改る、とある。津軽町の由来については、利直公(盛岡藩初代藩主)のとき、津軽者の帰化せしを置かれしと云う(盛岡妙子)とあるように、天正年間に津軽の人々が南部氏を頼りに移って来たので当地に居住させた所に名付けられたという。」津志田村は、現在では、盛岡市の南の都南村の中心地であり、国道4号線が通り、東北本線岩手飯岡駅がある。また、東北新幹線が通り、少し西側には東北自動車道が通っている。次に、津軽街道であるが、鹿角街道ともいう。盛岡から津軽への直道で、岩手県滝沢村茨島を起点に大更一平館一松尾一荒沢一田山一兄畑一花輪一毛馬内一小坂一濁川番所(関所)一坂梨峠一碓ヶ関番所一蔵館一石川一弘前までの街道で、およそ現在の東北自動車道は、この街道に沿ってコースを通っている。

盛岡から弘前へ向かつては津軽街道、弘前から盛岡へ向かつては鹿角街道といった、旧津軽坂（現青森市鶴ヶ坂）は津軽平野から大沢迦峠を越えて外ヶ濱（青森平野）に下った所にあるが、寛永15年（1635年）津軽三代藩主信義のとき、藩営牧場の津軽坂牧が開かれたが天保10年（1839）廃止された。文化14年（1817）九代藩主寧親^{へいすちか}の命によって鶴賀坂と改められた。その後鶴ヶ坂と書くようになった。旧津軽野村（現弘前市津賀野）は、天文年間（1532～1555）の津合流野と書かれ、江戸期には津軽野と呼ばれた。平川と浅瀬石川の合流する付近に位置している。津合流とは平川と浅瀬石川の合流を指したものと考えられる。文化14年、津賀野^{つがの}と改称された。久安百首の「つかろの野へ萩さかり」の場所に比定されている。旧津軽坂・旧津軽野は自然地名とも考えられるが、改名された例として人文地名に入れておきたい。以上が津軽の人文地名で、全国にある津軽などの人文地名は、青森県津軽との人的交流のところに付いた地名のようである。なお地名では残っていないが、福井県敦賀にはかつては津軽藩の蔵屋敷があったし、東京墨田区J R錦糸町駅北口のあたりはかつて津軽藩の江戸屋敷のあったところであるが、現在も「津軽稲荷神社」が残り、地区の守り神として、また、社殿併設の町会会館にはコミュニティー結束のかなめを果たしているようである。町会で、今年は弘前市のさくらまつりを訪問することになっているし、子供や若者同志の交流を始めたいということで、また人的交流が始まるようである。

いよいよ、地名「津軽」の語源についてであるが、平安時代末期の「清輔朝臣集」に「石ふみ（壺の碑）やつかろのをちにありときくえそ（蝦夷）世の中をおもいはなれぬ」とみえ、また「久安百首」に「えそがす（住）むつかろの野へ（辺）の萩さかり（盛）こや錦木のたてるなるらむ」、さらに鎌倉中期の「夫木集^{ふぼく}」に、「別るれど別るとおもはずいでは（出羽）なるつかろの鳥のたえじと思へば」とあり、平安末期～鎌倉中期の歌では「つかろ」と書かれている。鎌倉後期の正中2年（1325）^{あんどうむねよし}の安藤宗季^{あんとむねよし}譲状には「ゆつりわたす、つかろのはなはのこおり・けんかしま・しりひきのかう・かたのへんのかう」とみえ、また、「中世の風景を読むⅠ、蝦夷の世界と北方世界」（新人物往来社）の“津軽の城と村”佐藤仁氏の表Ⅰ“中世の史料にみえる津軽の地名”によると前述のはなはのこおりの後から出ているほか、興国6年（1345）の北畠顯信宛行状に「通賀路田舎郡内安庶子郷」とあり、また弘和2年（1382）そへ寄進状に「つかろくろいし（黒石）のうちにんさと（新里）のこと」（3史料とも「新渡戸文書」）のことが書かれている。以上のことから、平安末期から室町時代までの地名「津軽」については、つかろ・つかる・通賀路などと書かれている。文字で書かれているのは、つかろ・つかるであるが、そう呼んだかという検討を要すると思う。というのは、現在はゆずりわたすを、ゆつりわたす、しりへきのごうを、しりへきのこう、と清音で書いてあるからである。同じ史料の嘉元2年（1304）の曾我泰光譲状に「いわたでのかう」、同3年の尼たうしやう譲状に「ひらかのこおりなかのまち井のうちぬまたてのむら」とあるように、だて＝楯をたてと書いているようである。したがって、つかる・つかろも現在のようにつがる・つがろと濁音でよんでいても清音で書かれていると思われる。また、図9は、鎌倉時代に書かれた拾芥抄にある行基図形式の「大日本国図」であるが（「風景の考古学」千田稔著）、津軽大里のほかに都河路

大 国 と あり、
都河路とは岩木川
をさしたものと考
えられる。

いままで述べて
きたように、日本
書紀に書かれてい
る柵城の地名は、
自然的特徴で解釈
できるものであり、
津刈川・津軽沢・
津軽島の自然的特
徴も「漬かる」で
あり、古代～中世
の読み方も「つか
ろ」「つかる」「つ
がろ」「つがる」
であるので、地名
「津軽」の語源は



図9 『拾芥抄』(慶長木活字本)の「大日本国図」部分

「漬かる」であると考えられる。「つかる」「つがる」は清音からだんだん濁音化してきたものか、または、最初から区別できないような発音であったものか、どちらかと考えられる。さて、場所であるが、拾芥抄に都賀路とあり、南北朝代に通賀路と路がついており、路は川と考えることから岩木川のことと考えられ、また、流域は芦原の湿地地帯で「漬かる」ような場所なので、地名「津軽」は岩木川流域についた名前と考えられる。また、この地域に住んでいた人々を津軽蝦夷といったことと考えられる。

今までは、地名「津軽」にかかわることについて書いてきたが、その他の柵養・渡嶋・膽振鉏・有間濱・後方羊蹄などについて述べてみたい。柵養の蝦夷とは柵造に養われている蝦夷ということで大和政権に帰服している蝦夷と考えられる。渡嶋は津軽よりもさらに北の蝦夷と考えられるが、津軽海峡をはさんで、北海道と本州北部との縄文時代の黒曜石・ヒスイ・アスファルトの交易、円筒土器の分布、弥生時代の田舎館の垂柳土器と函館近くの恵山式土器の分布、古代(奈良・平安時代)の秋田・盛岡以北から北海道に分布する擦文土器の分布などからみて、北海道と津軽の蝦夷の交流はあったと考えられ、また、津軽から北海道は向こうに見えるので、渡嶋は北海道と考えてもよいのではと思われる。

膽振鉏であるが、5万分の1地形図には同じ名前はないが、揖理(和歌山県高野口町飯降)・

飯降山（福井県大野市）や、机差山（新潟県飯豊連峰）のように、膽振は飯を盛った様な山から急斜面がすそまでつづき、鉏はすき＝くわの意で、さえ（塞・障害・崖）で、海と山との間の狭い地形や、または、長崎県対馬にある小字名の「^{たふ}隙」のように狭い谷間の地形が考えられる。したがってこの両方の地形がある白神山地から降ってきてすそに崖がある岩崎から鰯ヶ沢にかけての西海岸の地形か、津軽半島の津軽山地から降ってきて崖がある脇元から平舘までの地形が考えられるが、「日本書紀」では地名は順序に書いているので、津軽よりは北の方の、津軽半島北部のどこかと考えられる。

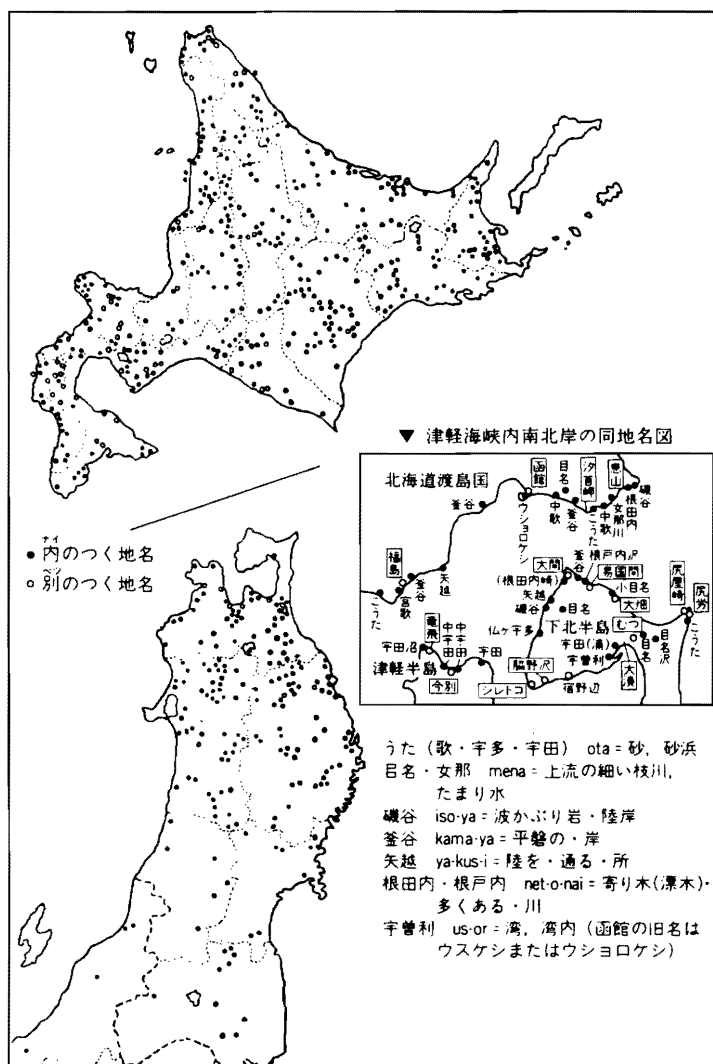
有間の濱の有間（有馬）は東北～九州まである地名であるが、あり（有・蟻・在）はある・存在するの意味で、ま（間・澗・馬）は、谷間・入江・港湾などが考えられ、有間は、澗がある所で、深浦の^{あづま}吾妻浜・十三湖（本来は十三と呼ばれていたが、湖（潟）の水戸口がせまく門^{とら}狭からきた地名と考えられる。十三集落の小字に土佐があり、高知県の土佐も浦戸湾口が狭く同じ語源と考えられる。）小泊、^{うとう}善知鳥（青森の旧名）まで比定する説があるが、中世の「津軽郡中名字」の江流末郡は岩木川の末で、岩木川河口の左岸地域と考えられるし、^ま馬（間）郡は十三湖の間・澗にのぞむ、岩木川河口の右岸地域であり、これらの地名も自然的特徴から付けられたと考えられる。したがって、有間は十三湖をいったものと考えられ、有間の濱は十三湖付近の濱と考えられる。

最後に後方羊蹄（^{しりへし}斯梨蔽之）であるが、深浦付近・十三湖付近・青森市の後潟の^{すりばち}播鉢山、北海道の後志地方などの比定説がある。北海道の後志は前述のように明治のはじめに付けられたものであり、羊蹄山はアイヌ語でマチネシリとってあった山を後方羊蹄、ピンネシリとってあった尻別岳を前方羊蹄と和名に変えたのである。シリ・シルというのは大地・山の意味があり、女山・男山の意味のようである。羊蹄というのは、漢名では植物の「ぎしぎし」であるが、熊本方言ではいたどり（虎杖）、すいば（酸葉）もぎしぎしという。佐渡では植物のきほうし（擬宝珠）をきしきしという。羊蹄という地名は、植物にちなむものか、また、羊の蹄のような地形からくるものか、さらにぎしぎしという音からくるものか更に検討してみたい。

アイヌ語ではシリベシ・シリヘシというのはシリはあたり・大地、ベツ・ヘシは大きな川、で、シリベツは大河と言われている。それに対してナイは小さな川と言われている。金田一京助の学弟子で知里真志保からアイヌ語を習いアイヌ語地名研究の神様と言われる山田秀三氏は、北海道アイヌ語地名の3分の1はベツとナイのつく地名だと言っている。図10は北海道・東北地方の「アイヌ語地名の分布図」である。アイヌ語では川はナイとベツで、ナイは知里真志保著「地名アイヌ語辞典」では川・谷川・沢、萱野茂著「アイヌ語辞典」では沢・小沢となっている。ベツは、両辞典とも川となっている。川も北海道北端部の川にみられるように、上内太路川・下内太路川・猿払川など、ヘツ・ベツ・ベツなどと呼ばれている。地形などで調べてみるとアイヌ語では日本語でいっている川という言葉はなく、ナイは日本語の内^{うち}であり、ベツは日本語の^{フチ}淵・^{フチ}縁・^{ヘチ}辺地と思われる。アイヌ語の川というのは、川そのものを表す言葉でなく、ナイは川が流れている谷間の内^{うち}であり、ベツは川が流れている縁・辺地または、大きい川が海辺に出る縁地と同じ意味で考えた方がよいよう

したがって、後方羊蹄（斯梨蔽之）もアイヌ語でなく、日本語的な意味で考えてみたい。しりは大きな川の一番の尻であり、べしはその辺地と考えられる。後方羊蹄にはこまのりのみべつこ郡領が置かれているが、柵城の設置場所も、信濃川・三面川・雄物川・米代川などの河口にあり、また、有間の濱に近いと考えられるので十三湖の岩木川河口の辺地が十分考えられる。これらの河口は比羅夫の船団の寄港に便利

本論は、福士壽一「地名「津軽」について—研究ノート」(鏡陵第27号、1997年)に加筆した内容である。



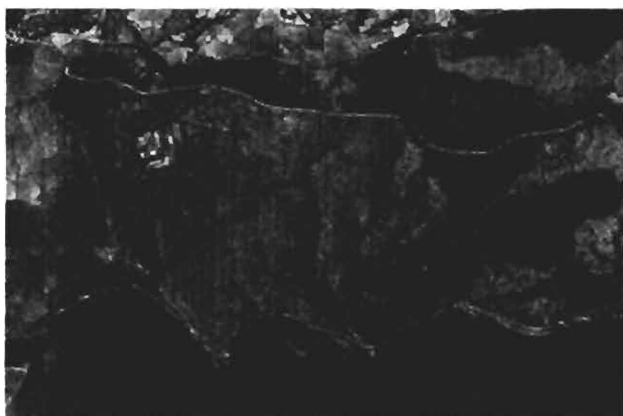


図11 福島城跡空中写真（青森県教育委員会、「十三湊と安藤氏」1998年）

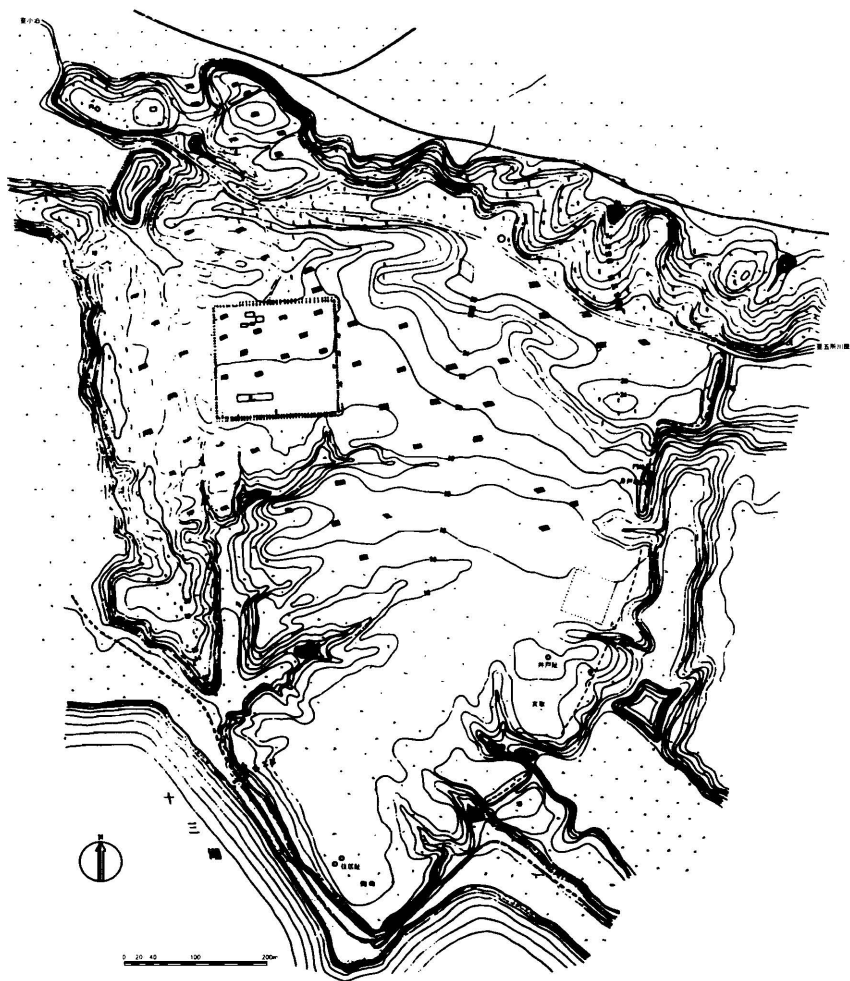


図12 福島城跡全図（青森県教育委員会、「十三湊と安藤氏」1998年）